

松下国際財団 研究助成

研究報告

【氏名】海老原 梨江

【所属】(助成決定時) 早稲田大学大学院文学研究科

【研究題目】

中期ビザンティン聖堂壁画の装飾プログラムにおける聖人像の意義と役割について

【研究の目的】

研究の目的は、中期ビザンティン（9世紀半ば-13世紀初頭）聖堂内の壁面に並ぶ諸聖人の単独像がどのような基準を以て選択され配置されたのか、という問題の考察をとおして、聖堂装飾プログラムにおけるこの種の図像の意義と役割を考察することにある。対象時期の聖堂装飾は、神学的な位階と建築的な位階が対応するよう図像配置が行われた。上部のキリスト像やキリスト伝図像に次いで最も低い壁面に描かれる諸聖人の姿は、装飾プログラムにおいて、また観者との関係において、どのような役割を期待されその場所を獲得するのか。中期ビザンティンは現在まで踏襲される聖堂装飾の基本的な枠組が形成された時期であり、イコンや写本などの他の媒体でも聖人像が飛躍的に増大した。こうした時代背景を踏まえながら、本研究では、総合的な視点に立って聖堂装飾の聖人像の在り方を検討していく。ビザンティン時代における聖人という存在、彼らを象る図像、そして聖堂装飾そのものの性質についても言及していきたい。

【研究の内容・方法】

研究対象を、ギリシアに現存し、11-12世紀の壁画を持つ聖堂に設定する。この時期、聖堂建築が特に活性化し、聖人像を擁するイコンや写本等の制作が隆盛した。歴史的背景として、貴族と修道院の勃興に伴う宗教建築の再建と建設、美術作品の増加が指摘できよう。

対象とする聖堂をリストアップするため、まず、これまでに出版された文献に掲載される聖堂リストを参照した。最新の情報を入手するため、近年発行された考古学雑誌やギリシア各地方の歴史考古学系雑誌、聖堂のモノグラフにも当たり、83聖堂を抽出した。各聖堂について建築形態、建築・壁画の制作年代、壁画の図像配置、参考文献を記述し、目録を作成した。並行して83聖堂に見られる聖人の一覧を作った。220名を採録するこの一覧には、各聖人がどの聖堂のどの壁面に描かれたかを記録した。

上記の資料をもとに、二つの軸を据えて考察を進める。第一に各聖人は複数の聖堂のどの壁面に表れるか、第二に個々の聖堂装飾における聖人像の選択と配置である。初期ビザンティン（4-7世紀）において広く殉教者と捉えられた（徐々に主教や修道士に対する崇敬も始まるが）聖人は、中期以降、主教・聖戦士・医療聖人・修道聖人・殉教者・聖女など明確にカテゴリー化されていく。本調査では聖人をカテゴリー毎に把握し、ビザンティン社会における位置づけ、図像と図像配置、その歴史的展開を観察した。他の聖人とは別格の献堂対象の聖人、また11世紀以降各地に出現する特定の地方で拝された聖人に関しても、別に検討を行った。

以上の作業から導かれた各区分の聖人の図像・図像配置の観察結果をもとに、各聖堂の装飾プログラムを見る。83聖堂の中から壁画の保存状態の良い11聖堂を選び、そこに描かれた諸聖人たちと、聖堂の設立過程・地方・寄進者・当時普及していた聖者暦・周囲の図像との関係を調査した。またギリシアとイタリアにおいて聖堂の実地検分を行い、三次元空間の考察対象をより正確に把握するよう努めた。

【結論・考察】

上述の手続きを踏み、以下の成果が得られた。まず聖人の各カテゴリーの図像とその配置における特色を具体的に把握できた。また、今後の研究に展開できる図像学的な諸問題も見出すことができた。中期に定着した位階的な装飾プログラムの大枠に従いながら、各聖堂の装飾は多様な様相を呈する。聖堂上部に描かれるキリスト像や聖母子像、キリスト伝図像の配置には、基本的に聖堂間による大きな差が認められないが、聖人像のそれはより自由度の高いものであった。典礼や典礼暦、地方性、寄進者の意向など、複数の基準をもとに聖人が選ばれ、描かれている。壁面を飾る聖人たちは、いわば聖堂の個性の表明であった。装飾プログラムの背景には、神学的知識を有す指揮者の存在が想定される。聖人伝普及に伴う、神学的知識の拡大と聖人と信徒の関係の深化も指摘できよう。観者に最も近い場所に描かれた諸聖人の像は、聖堂内に表された位階的な神の世界において、地上と天上を結ぶ役割を果たした。信徒との個人的で親密な関係が、柔軟で多様な聖人の選択と図像配置を実現したものと考えられよう。